

向七右衛門長男 (四五歳許)

西山平右衛門 (五十歳許)

宮下助松 (二十六歳許)

右ノ七名中西山ハ二十五歳ノ頃發病セシモ現今ハ歇止シ宮下ハ目下北海道へ移住セリト云フ
因ニ曰ク近時越中地方ニ在ル一二ノ醫家ニ就ヒテ聽キシニ往々本病ヲ見ルコアリト之レニ由テ推
察スレハ全地方ニハ恐ラク蔓延性ニ流行スルモノナランカ猶ホ頃日辱知在弘前醫學子伊東重氏ヨ
リ書信アリ氏ハ津輕地方ニ於テ十餘年間ニ本病患者二十八名ヲ實見セラレタリト乃チ其傳播區域
ノ奈何ニ擴汎ナルヤヲ察シ得ヘシトス

抄 録

● 糖尿に就て

余ハ淺學なる文を顧みず近頃出版せる獨乙中央醫事新誌ニ掲載せる糖尿に關する二三の研究
報告を抄譯シ以テ讀者の一覽に供せんと云爾

一、滋養的糖尿 Alimentare Glykosurie に就て

S · F · 生

「ラファール」F. Raphael 氏は Olanio の臨床講義場において滋養的糖尿と有せる患者に就き研究し此の興味ある問題中尙疑問中よあざし点を明了ならしめたり其試験成績は左の如し

第一 「澱粉攝取により糖分を排泄せる患者に一定量の含水炭素をへ葡萄糖若くは澱粉状となし攝取せしむる時之糖分排泄上如何なる差違と示すや」を實驗せしに今一定量の含水炭素とば葡萄糖として與ふるときハ之れを澱粉(粉羹)として攝取せしむる際よりは糖分排泄の量多量なりと而して其の比は 5:10:1 なき之れに反し排泄時間又は著しき差違と示さず

第二 今「サツカロール」攝取により若しくは澱粉攝取後營養的糖尿を誘起する患者に同一量の葡萄糖を與ふるときハ糖分排泄の差違如何」一氏と先づ自己の實驗と從來の觀察とおよび通常後者即ち澱粉攝取后糖尿を來す患者は前者より多量の糖分を排泄せど然れども糖排泄時間は兩者一の區別なきを確定せり

第三 排泄する糖分の量は攝取せし糖分の量と一定の關係と有するや」本問題に關して蔗糖と以て施行せし古き幾多の實驗あり「ソノジール」及ビ「ロキユール」氏等は蔗糖は輸出入間ニ常ニ平均を保持すと雖も其他の者は然らずと云ふ故ニ亦蔗糖を以て得たる成績は葡萄糖も適用せしめ得ざるあり

第四 同一量の葡萄糖を異なりたる時に與ふる時之糖分排泄の狀況如何」を研究せし其間には

著明の變化の存在する者おして殊に滋養的糖尿の全問題中一時的の素因 *Zeitliche Disposition* と著大の影響と有する者とす實に之れにより吾人と不定量の糖分攝取より其の排泄上不規則なる差と現はすに至るを証明し得るなりと

終りよ著者と「ザツカロール」及び澱粉より惹起する滋養的糖尿と殆んど類似の者にして此の兩者の定性的よりと寧ろ定量的に區別を示す者なりと而して滋養的糖尿の素因は患者の多くハ時に従ひ異なるものおして未だ初期の糖尿病患者にして其症候の著明ならざる時期に往々來るを以て實地上亦大に注目すべきなりと云ふ

(*Zeitschrift für Klin. Medizin* Bd. XXXVII.)

二、妊婦に於ける滋養的糖尿

「ヒューフバウエル」J. Hüf Bauer 氏は妊婦お普通朝食を攝取せしめたる后百瓦の化學的純粹の葡萄糖をば茶又は水と共に與へ一時半乃至二時間の后「カテーテル」おより尿を排泄し之を驗せしよ左の成績を得たりと

四十五回の正規の妊婦おありては第二ヶ月の終りより其三十九回に於て糖分検査と陽性なりき殊に妊娠月の重なるよ従ひ排泄する糖分の量を増加せりと然れども病的妊娠流産子宮外妊娠卵の死亡せる場合等にありては検尿試験は全く陰性の成績を得たりと云ふ

以上の事實より氏は「グリコーゲン」検査をなし若し陽性成績を得たる時は是れを以て妊娠の症候とし且つ其生理的妊娠にして卵の障害なく發育せる者と認むるを得るなりと云へり

Hufbauer 氏は尙同時に「コロストリウム」存在し其顆粒狀元素は沃度より特異の褐色を呈するを實見せり設令「コロストリウム」中「グリコーゲン」の存在するや否やは未だ疑問の中ありと雖多くの場合又は妊娠中化學的の變化より其存在を証明し得るなり

(Wiener Klin. Rundschau, 1899 No. 1.)

三、肝臓と糖尿症

肝臓は糖尿に對し如何なる關係を有せるやを Strauss 氏は人類併ふ動物お就き實驗せり

著者は三十八名の種々の肝臓病中僅に二回百瓦の葡萄糖攝取后滲漏性糖尿 Transitorische Glykosurie と惹起せり而して本患者は共に嘗て肝臓部に外傷を受けしとありしと然れども外傷は他器管殊に神経に影響を及ぼし以て糖尿を誘起せりと云ふ可からむ、蛙おておせる試験より肝臓は糖分排泄上如何なる關係を有するや明確なる証明なく尙亦肝臓を摘出せる蛙お多量の糖分を皮下注入するに稍々劣ると雖も肝臓位置に於て是れと類化し得ると云ふ、著者は是れを以て肝臓は今若し他器管の同時に障害を來す事なき時と人類併に蛙お一時迅速お多量の含水炭素を與ふるも糖分排泄に極めて僅微の抗俯となすのみなりと云へり

今亦只肝臓に限局せる疾病は糖尿症を惹起する者にあらずして注意すべき傳染、中毒等に際し他の糖分の新陳代謝上必要なる器官も同時に障害せられざる可からざりしとして亦肝機能の奪脱せらるゝと雖も他の健全なる器官によつて含水炭素新陳代謝の變常を調節し以て糖尿の排泄を防ぐも一朝肝臓變化を供ふて糖分排泄ある時は同時に健体にありては含水炭素新陳代謝の障害を調和する機能に欠点なかるべからざるなり

(Berliner Klin. Wochenschrift 1899. No. 51)

四、種々の糖類の人体に及ぼす影響

「ストラウス」Strauss 氏の滋養的糖尿を來すの素因を有する非糖尿病家に各空腸時に百瓦の葡萄糖「ガラクトーゼ」Galaktose 「ザッカローゼ」Saccharose 「ラクトーゼ」Laktose 「マンローゼ」Mannitose 其他又百四十二瓦の小麥粉(百瓦の糖分を一對す)と與へ次て各種糖分攝取後の尿變化を試験せり、尿中も最も容易に現出する「ガラクトーゼ」にして困難なると「レブローゼ」をす而して「グリコーゼ」「ザッカローゼ」「ラクトーゼ」等は其中間に位せり也

今澱粉を攝取する時は「デキストローゼ」となり「ザッカローゼ」「ラクトーゼ」をありては葡萄糖、其他の糖類は同性質と有して尿中に現出する是等の實驗は糖尿病家も於ても亦同一の結果を得るなり而して該成績は嘗て幾多の學者の得たる成績と相反し從來の實見による時と攝取せる糖分は變

化せず其儘尿中より再現すべしと

「シブローゼ」以上の定理により糖尿病家の食餌として應用し得べきの實地家の經驗により同意する所あり

重複糖の分解及吸収と消化器管殊に胃の鹽酸減少症若くは運動元進等に影響を著にして試験的にお攝取せる糖分の吸収を緩徐ならしめ以て尿中に排泄する量をして僅少ならしむるを得るなりと
1526

(Berliner Klin. Wochenschrift 1899 No. 18—19.)

五、糖尿病性昏睡に於ける尿の變化

「ゼッチ」(Zetzi)氏の糖尿病性昏睡の原因に患者体内に尿素と蛋白質との中間産物蓄積するが爲めありと今糖尿病患者の尿を檢するに尿の酸性と著しく増加するも尿酸排泄量も變化なく「アンモニヤ」は亦減少せり然に「アンモニヤ」中窒素の含量は全尿量中にお於ける窒素量に關し差違なきなり殊に著しく減少すると尿素にして尿酸併に尿中の全窒素量に對し更著しく減少せり

尿中窒素含有の越幾斯は甚しく増加し全尿量中窒素の三十一、六四%を示するに至る此の越幾斯の増加は全窒素の六十二、二七%を有する尿素中の窒素消費せらるゝが故なり著者此の越幾斯物の蓄積は即ち中毒的原因をなすなりと云へり

其他非糖糖病性昏睡もありても多くの學者によるに同一理由ならんと言ふ「クレンペレル」氏 Klemperer は癌硬性昏睡及び急性肝萎縮に於ける昏睡を實見せり后者にありては尿素の含窒素量を全の五十七、二六%にして窒素含有の越幾斯分を三十六、一八%に増加せりと云ふ

(Gazz. degli ospedali e delle clin. 1898 No. 148)

麻疹早期診断として Koplik 氏症狀

「ハ、コプリック」H. koplik 氏と一千八百九十八年麻疹早期診断的症候として左の如く記載せり

「本症狀は麻疹患者の未だ發疹せざる二十四乃至七十二時間以前に現はるゝ者あして之により絶對的確實に麻疹を診断し得るなりと而して發疹は小ある不正鮮紅色の斑点おして口唇若くは頬部粘膜に生し其の中心は帶青白色の点と有す此の中心点は最も特異なる者とす故に充分ある日光により注意して觀察せざる可からざりて此等の斑点は決して他部に生ずる事なく亦他病を經發するとなきなり

其后次で「スラウヰック」Stawick 氏の Charlie の小兒科にありて五十二人の麻疹患者中四十五人に特異の「コプリック」氏症候を實見せり氏の記載によれば斑点は帶青白色の僅に突出せる〇、二乃至〇、六ミリメートル「直徑の圓き發疹として其中央に凡そ「リンゼン」大の發赤せる粘膜部分あり而して斑点數は多くは各側六乃至二十個とす然れ雖亦數百に至るあり亦發疹只一側にのみ生ずる

事あり殊は好んで發生するを下臼齒は對する頰部粘膜とす、斑点を檢する際し充分なる日光若くは熱熾燈を用ひざる可あり而して是等の斑点決して融合せず亦他の口内疾病と續發せざるなり今攝子および之れを剝離するは容易にして疼痛出血等なく鏡檢上厚き塊狀物にして一部は口唇表皮の脂化せる者を見ると氏は尙此「コプリック」症狀は獨り麻疹に來るを以て其の絶對的特有の症候とし而して多くは前驅期の第一乃至第二日に現れる故に甚だ早期ありて診斷し得るなり然り而して眞性發疹の現れる、迄漸次其數を増加し次て三乃至四日停整し皮膚發疹の露はる、時と直に消失せしめて而して斑點は苦疾と與へず從ふて之れか所置を要せざるなり又其數の豫后上一定の關係ありと云ふ

晩近「クニスベル」J. Knuspe「ハーツス」Hayas 氏等は「コプリック」症狀をば臨床的實見に徴し其確實なるを証明せり而して該疹は「クニルベル」氏の五日前「ハーツス」氏の一乃至七日前に現れると Hayas 氏と又斑點多くは Koplik u. Slawyk 氏等の記述せし者より比し大にして好んで后下臼齒に對する頰粘膜に發生すも雖も亦「ステノン」氏管開口部或は稀は口唇粘膜に生ずるとして而して兩氏と屢膜様若しくは縮緬狀の被物と見たりと云ふ

之れにより見るに「コプリック」症狀の確實なる麻疹の早期症候たるは學者共に是認する所吾人と時に亦麻疹の早期診斷を要する場合なきありし此の時と際し本症狀に注目せし其得る所大な

らん

Centralblatt. für inn. Medizin. 1898—1899.

結核症と梅毒

梅毒と結核とは悖逆相容れを互に治療的拮抗作用 Therapeutische Antagonis を呈すと云へども其報告甚た少なきなり

Monteverdi 氏と嘗て進行性肺結核患者一朝梅毒感染の爲め凡ての結核症状速く消失せると實見せり氏は是れ血中に抗毒素浸入し結核病竈の周圍に硬化機能をなし遂之れを荒蕪せしめたるによるならん

Randfleisch 氏は一千八百九十四年一の解剖的實見と報告せり之れ一の結核性再芽として之れに發生せし粟粒結節と初期硬結を形成せし梅毒感染の爲め結核と全く包被せられ以て善良なる経過をとりし者ありき

Borst 氏は一千八百九十八年七月七日「ウルツブルグ」に於ける醫會にて三回の實見を報告せり肺にありし結核性空洞を硬化せる護膜腫により或は泥狀の纖維性結締織の爲め包被せられありきと氏は斯の如き善良なる作用を亦臨床的にも多く証明せられざる可からすと云へり

晩近の獨乙伯林萬國結核病會に於て Portucales 氏は結核の梅毒感染后治癒せる數例を報告せりと

云々

●按外五件——開腹ノ前後

細流子抄

(婦人科中央誌第三十七號摘要ノ摘要)

診斷 (開腹前)

(開腹後)

處置及ヒ轉歸

腹膜結核

十八條ノ蛔蟲塊

小腸切開——摘出——治

右喇叭管炎

蟲樣突起壞疽

切除

骨盤器ノ腫瘍

轉位セル肥大脾臟

切除——治

肝臟エヒノコックス

血液ヲ充セル腸間膜囊腫

切除——治

骨盤器(子宮以外)ノ

腹膜下子宮筋腫及ヒ妊娠?

切除

纖維肉腫及ヒ妊娠?

(子宮ト認シハ頸ニシテ體トハ索狀物(所謂下半部?)ニコリテ連結セルノミ)

(但シ子宮モ共ニ切除セルハ術後ニ至テ始テ知レリ)

(一)(二)(三)(四)(五)

細流子云く診とそれ此の如く難と否な診の難きにあらそ斷の難きなり斷の難きにわかと診して其眞を斷するの難さふり故に謂く斷字の後へ毎に半箇の?標を伴ふべし伴はざる可らず伴とざるを

得ざる也と非歟世の妄斷する者再思せよ三省せよこれ豈ひとり疾を診する者の爲のみ言はむや

漫 録

● 予か所謂三節

醫科一年 文盲生

歳新年に入りては、騷人墨客の徒、三節なるも

のを賦詠して、同好み類つを常とす、蓋し新年

を壽するの意也、聖代に謳歌して天慶と壽とる

も、寔に昇平の一樂事とや謂はん、予亦三節一

篇あり、然れども余が所謂三節は、世も所謂三

節と大に其趣を異にし、壽するに非ず、賀とる

は非ず、歡ぶに非ず、哀むも非ず、頗る異様か

して頗る異様なり、故よ、驕者之を讀まむ笑ふ

て舍つべく、惰者之を讀まば嘲つて止まん、笑

と嘲とは、絲毫も予が意とする所に非ず、世間

若し余と境を同ふするものあらば、必ず同情を

表と可きを信ぜれば亦、いで其要を左に記し

て見む

(一) 歳晚某生に與へて且告く

歳茲に窮し、人も亦窮す、窮陰漫々たり、泣く

も笑ふも悲しむも、喜ぶも剩す處僅に廿有三時、

碌々又碌々徒々に送り徒らに迎ふ、年華の送迎

眞個に夢の如し、

人間は常か、榮枯盛衰てふ大環を旋走すると其

に、功過と成敗とは、端なく相寄り相連りて、
貴賤貧富の間に、吾人を追ひ回す、殊に生
存競争の劇甚なる、人類迷ひに相刻殺するの光
景に至りては、吾人實お呆然たるの外なし、説
く者曰く、是れ浮世の真相なりと嗚呼浮世なる
哉浮世なる哉、吾人は唯皇天か默示せる、航路
計ありや、

に向ふて、浮世の潮と共に流れ行かんのみ、
人の決して無意義よて生活し得るもの非ず
、必を生活すべき至大なる意義を有するに相違
なし、首陽山お薇を採りしと、伯夷叔齊が生活
の爲めよして、石川五右衛門か盜をなせしも又
亦生活の爲と知らざや、人已に然り、然らば一
國の生活の如何、

如是我聞、世お紳士となん呼べる一種の怪物ありと、紳士とぞ其れ何者ぞ、「チッキ」之と釋し

て曰く、余は世に所謂紳士となるを好まず、何と
なれば紳士とは怠り者との變名あればありと、
當時稱して美言とせり、噫、紳士とぞ果して怠
り者の變名歟、若し然らば紳士との誠に社會の
厄介物なり、某生く足下よ之を退治するの好
無邪氣に歌ふて無邪氣に踊る、王子公孫の目よ
り見れば平民主義ほど面黒きものはわらざるべ
く、有邪氣に喰ひ有邪氣に飲む、平民の目より
見れば、貴族主義ほど氣樂なるものはわらざる
べし、然れども貴族的少數の快樂は、平民的多
大なる快樂に孰れそや、世には兎角毀譽褒貶に
歡懼して、自家立命の地を知らず、猥りよ貴族
的少數の快樂を羨み、徒らに裝ひ徒らに傲り、
以て天職と度外視する阿蒙あり、思ふお彼等か

見て以て快樂となすの、所謂肉慾的淫樂のみ、
嗚呼、五尺と舉げて利祿の犠牲となす、渠等の
心中思へばく殆い哉、

予敢て賈誼と學ぶあらず、然も時勢に向ふて
言ふべき事多し、要するに方今學生社會に於て
、痛哭すべきもの一、流涕すべきもの三、長大

息すべきもの五、慨して當さよ以て慊すべきもの
其數を知らず、想ふよ足下も亦余と感を異ふ
せさらんか、他日相逢ふて共に語ることを樂む
可し、

維時冷氣漸然、千萬保蓄して以て、區々瞻仰之
心に副へよ、

(二) 除 夕

歲茲に暮矣、萬感其れ如何、

冥に響く除夜之鐘、過去に餞する一種の哀歌た

るを思へば、孰れか一縷の人生觀なからんや、
況んや、江山萬里、故山を棄て、故山を棄てら
れ、萍水轉蓬、天涯お淪落して事毎に違ひ、空
しく骸葬鬱勃の氣と齋らして、草萊に老ゆる、
可憐の孤客に於てをや、觀來れば吾人亦實よ一
の可憐兒也、

請ふ吾人として事物の難事を曰はしめよ、最初
の目的を逸せせして、始終を一貫とると、亦難
中の一なふざる可からず、思ふに茫々たる人生
、意の如くならざるもの十に毎八九、東喪西
得、百端の遭逢、晨と夕とを期せず、成敗の別
る、所以、因果の窮する處、變轉輪廻、實は環
の端あきか如し、偏通と輕斷とい、到底事と愆
る所以にして、至誠と堪能とと、必とす事を遂
行とる所以の道也、世には兎角主觀的妄念の爲

め、理想非なる理想を立て、端々に見在と衝突を來し、蹉跌を以て不遇とみし、生を厭ひ世を厭ひ、終る見在、と永訣するものあり、狭量も亦甚し、かくて始終を一貫せんと、固より得べからず、凡る事の成らざるの、當面の事を曲視して、之に處するの道を盡さざる由る、換言すれば、唯至誠事に従ふざるの罪あるのみ、人は常に理想と趁ふて進むと共に、一進又一進、飽く迄自個の行動をして精誠と伴せしめざる可からず、吾人の實ある理想の爲めに動き、理想の爲めに活く、理想去て吾人なし、然れども、實現と内容せざる理想は決して眞の理想に非ず、眞の理想に非ざれば、眞の進歩を見る事能はず、是之を空想と云ふ、千百の空想は終に一の理想よ如かざるなり、鯤の化して鵬とみる、既に

大般の進歩なり、而して尙南冥も適かんとす、是れ眞進の極と知らすや、吾人の不敏おして、未だ著した進歩あらず、未だ著しき効果あらず、而して窮亦甚し、吾人實より自ら愧矣、吾人う除夜に逢ふ毎、感懷禁する能はざるもの、則ち此一事なり、要するに吾人が過去は、凡て非境ありき、然れども、決して絶体的非境あらず、寧ろ試金的非境ありき、吾人が非境を以て大に好伴侶とせずもの、固より偶爾に非ず、人生實に意外の事多く、支吾蹉跌亦鮮からず、鬼死して狗烹らる、吾人またて尺寸の功あらずば、烹らるゝも亦榮あり、議者の誹言敢て必ずしも問はざる可し、吾人の只吾人か理想の直線に向ふて快奔せんのみ、人は除夜に際して、頻に忘年を謂ふと雖も、吾

人は却て不老年を唱ふ、何となれば、既往てふ大歴史と、未來の大般鑑ふして、幾度か忘れんと欲して遂に忘るゝ能はされば也、況んや、今年のお如き吾輩と、最も多故おして、最も興味多く、最も危殆に瀕して、最も窮せる年などしよ於てをや、吾人念ふて此お至る、感極りて終に言ふ處を知らず、

(三) 新年

來ん年と來る年とて幾とせか

夢おもめみるやみ夜なるらん

是れ筑前の偉老婦、野村望東尼か、新春述懐の妙歌おあつとや、吾人新年に逢ふ毎お、又亦此感無んばあらせ、

已に新年と云ふ、頗る新なるか如し、然れとも眞お年と共お新あるもの、看來りて果して幾人

ぞ、年の茲に改まるも、人之依然たる阿蒙あり、阿蒙尙可なり、若し夫れ年と共に老ひ去り、年と共に、朽却するものよ至りては、些も新なる所以を知らず、唯それ新ならず、何を以てか新を祝せん、恭賀新正とい、固是れ虚禮のみ、虚事のみ、必ずしも大々文字を連ねて、賀簡を發するを須ひざるなり、年と曆數にして變ぜざる限りは、三百六十五日の〇時〇分は、必ず新と呼ぶべき誕生日至る、但人の則ち然らず、自ら新と爲さざれば、決して新なる事能はせ、人は理想おして現實とあるの日の、則ち眞の新なり、換言すれば進歩に外ならせ、人にして竿頭一步と進轉せば、宜しく自ら賀を可し、吾人の假令、年、新年に屬せざるも、吾人にして新あるの實を擧げたらんには、猶豫せず之れを賀す

可し、吾人の曆上の新を賀するよりも、自家の新と賀するは、想念の上より於て無限の興味あるとを忘れざればなり、

況んや吾人は、幾度の年と閲して、而も新あると能くす、幾度の險と冒さんとして、而も蹉跎に遭ひ、紅山萬里、獨り瘦骨を剩して、天涯に淪落し、父母に離れ、弟妹に遠あり、憂あるも醫するよ由なく、思あるも洩すよ處なく、涙を

以て進迎する事、幾春秋、而も未だ新なると能はず、天地に俯仰して感慨多き、吾人う今日の狀境に於てとや、嗚呼、人生五十年と雖も天地の悠久より見れど、唯是れ一の彈指に過ぎず、天と謂ひ、壽と謂ふ、亦是れ乗除の外にあり、英雄も學者も壯士も美人も、皆是れ泡中の影、馬前の塵なるを思へば、誰う晏然として赤松子

を學ばんや、吾人う汲々として新と望み、尙壯圖を抱て此春と仰ふるもの豈それ徒爾からんや、敢て以て吾人之人に對して賀と云ふを好まず、但新年に對して新を壽せんのみ、顧みて、吾人か既往の經過と追想すれば恍として一場の夢の如く、轉た烏兔匆匆の感無き能はざるあり、嗚呼甞めん哉、甞めん哉、斃れて而して後止ま

其昔立花北枝、歌ふて曰く、くる秋は風はあり
でもなありけり、と實は日月之容捨なく吾人を
追ふて走る、春去て落花の歎をなし、秋來りて
鬢邊乃霜影に驚くものと、其由來する處概ね主
觀に存せざんばあらず、鞭影に驚くの倦驚、豈
に焉ぞ千里を期すべけんや、世風を逐ふて妄行
と事とする凡俗物といざ知らず、苟くも前途に

大成と期して、學途は身を委ぬるの徒と、深く自ら警めざる可からず、嗚呼朝日よもろき霜柱、觸けての後は跡方もなし、噫、

● 隨想隨筆

不 哉 散 史

◎ 止水月を抱て流水月を放つの秋夜、想を遠く天涯に走らして耳と蛩虫の詩は傾け、影を嬌娥よ送らしめて歩を郊外に任せんか、薄命を嘯くの潺流峯に歸るの秋の聲、何れか吾が情を動かさざる、鳴鳥の森林の闇お叫び無量の鉦の音低く、柴庵を洩るゝの夕、卒塔婆影朽ちて相枕し古墳鮮苔は鎖すこと久しきの墓地を逍遙せば、誰か無限の感慨な々なや、誰か人生てふ問題の腦裡に湧出せざるものあらんや、

◎ 百年手に從て過ぎ萬事頭を轉すれば空なり、幾百年は歴史獨り靜めに古塚は眠ると雖ども、彼が赫々たる偉業は以て此墓を裝ふ能はざるが燦々たる功名と未だ此廢家を補ふ能はざるなり、大理や花崗の巨石以て其偉勳を彰し鉄柵嚴かに其屍と護ると雖ども、死者乃心事敢て慰む能はざるなり、墓碑乃宏壯人の膽と奪ふとも、金石旭陽お映じて燦たり爛たるとも、玉を炊ぎし夢は醒めて歸らざるなり、幾方の資財徒らに万人の恨に包まれて遺子の世襲せる處となす、寶藏の珍品逸物空しく枯骨殘骸の思あらしめ、迷執の雲長へお霽るゝ期なく永劫不盡の火に其死情を燃すのみ、悲むべきにあらざるや、

◎ 一夜破机に對し崇高天を嘲り深奥淵を笑ふの一書と讀む、久しくして倦み來る即ち獨歩兼六

が園に至る、眉の如き新月も既去りて、跡の
繹忽べきなく、怪しげな雲も大分霞れて空
一面は無数の星花今を盛りと妍と競ふ、あゝ、
世に時めく春の花清節に誇る秋の花、錦を
飾る霜の花白妙の雲と擬ふば雪の花、孰れ
も美且艶ならざるに非ざと雖ども、獨り高崇幽

可けれ、想ふ櫻花男兒の粹とも云ふべき投海の
蘇者南洲公は笑つて若殿原に殘骸と抛ちぬ、天
地悠悠偉人黙々、万斛の熱涙却て此中にあり
、蓋し丈夫の尙ぶ處の黙々の裡も事を斷じ事を
了するにあり、發して言となるの唯其の娛樂の
末枝に過ぎざるのみ、

遠の妙を極むるもの星の花若くものなる
べし、

◎苦なくんば樂おし戰闘なくんば平安おし、見
せや骨逞しき農夫が鉄鍬を揮つて盤根錯節と戰

◎人にして完全無欠此者なし而して人は互も他
の揚足を取りて批難す、之と世の通狀とす、丈
夫此間と堂々濶歩せんふり自己を信すべし、自
己の新見自己の行動を眞面目に信ずべし、あゝ、
天下皆非とするを疑はず天下皆是とするも信ぜ
ず、悠然又毅然として痕と万頃の波上に印し、
彼岸に向ふて直前するものこそ、大丈夫と云ふ

ひ流汗淋漓疲勞に堪へざるの時、鍬を投して畝
畔お踞し、一憩あたりを眺むる其慰安や實に言
ひ難きものあらん、又見よ古色掬すべきの行脚
僧が、飼慣の膝栗毛お鞭ち、長程險坂踏破し去
りて、悠然彼蒼に向つて神を暢ばすの時、其喜
樂や知る人ぞ知らん、何者の痴呆乎此勉強の生
涯に於て、齷齪として徒らに平垣と安逸とのみ

是れ求めんとする、彼等と行動を避け思慮を厭
はんとして營々たり、余と敢て言とん活潑に行
動せよ深刻に思慮せよ、然らば一條の活路坦々
として直に長安と達し其の慰や満ち喜や余りふ
ん、
高影分生等、温乎其容、躍々然髣髴聞咳響、
時際佳辰、憶恩師愈切焉、滿腔思情、極賦五絶、
不知異鄉客、萬里別有吞否
香茫千萬里、相憶不堪情、借門歐州客、家鄉紅
旭明

◎獨逸の詩人「ゴエテ」が歌ふて曰く、急がせに

休まずに、是ぞ汝の胸飾、心の底の奥に留め、浪
風荒く吹き倦くも、花咲く小徑たどるも、世
と去るまでの旗章と、朝に種を播きて夕に其果
を収穫らんととるもの何ぞ思はざるの甚しき、
十年高臥北窓下 仍是義皇以上人
過古戰場有感
不肖探て以て坐右の銘とせんあり、
鬼哭啾々雨不晴 料知曾失幾多兵 殘磴鳥去荒烟抹
古寺夙寒獸族平 絶代英雄墳墓下 千秋功業霸圖傾

St. Louis, Mo., U.S.A. 1910. 10. 10.

憶高安恩師

濱口竹軒

老楓如血愁無限 慘淡日曠管我情

日月如飛箭、斯時從別恩師、既五閱月、伯林月

海路上作

羅因水、海山萬里空悠悠、恩師發國前一日、撮
吟行路入白沙間 蒼海茫茫春意閑 漁客指言今夜雨

烟雲一抹沒能山

登立山

絶巔幾千仞岳勢自巍然全骨無肥肉奇巖盡刺天踏
雲雲乍冷捫石石行顛日夕辭山去孤峯銷翠煙

仰天堂主人記

どもすれば名を或る筋みかりて、實其欲を充さ
んとそるの輩、或は夫れ曉星の趣きよあらずし
て海砂の無數なるお非ざるか、時年始み際し祝
いと曰ひ喜びと曰ひ飲酒或は其節を失ふある状
をうる左は金子教授が節酒會々上よ於て口演あ
りしもの平易の内然も注慮すべきもの趣なかつ
ず記して以て諸彦と新ならんとす

●節酒の方法として杯の取やりを

廢するの希望

酒の酒たる所以てアルコールホルと稱する一種の

興奮劑と含有せるが爲なり。故に之を適度に飲
用すれば先づ心臓の機能を鼓舞し、血液循環と
亢進せるが故に。諸般の營養も佳良となり。従
て諸官能も活潑に發動し精神自ら爽快と覺ゆる
に至るなり。されど過度の勞動后疲勞と來すが
如く強度の亢奮にも亦此疲勞を伴ひ來るは、生
理學上の原則たるが故お、若し過量の酒と飲ま
んか。前に全く反し諸ゆる官能忽ち沈降して。心
臓衰弱し諸機械の營養頓よ不良となり。精神作
用甚だ不活潑となるのみならず。反て鬱憂し愉
快變じて則煩悶とある。彼の醫家が麻醉薬とし
て常お用ゆる處の「シロールホルム」或は「エー
テル」の如き。其身体お働く作用は。初めは皆亢
奮ならざるはあく。其結果として麻醉を來すよ
過ぎぬ。只藥物の性質に由り亢奮時間短くして

麻醉期長きか故に之を利用するしむ。

アルコホルも亦麻醉の極度に至れば。全く無感覺となり。人事を省せざる事宛然麻醉薬と異なる事なきあり。人各々特異性なるものありて一様には云ひ難けれど。慨して常用すれば次第に増量し。嫌忌變じて嗜好となり遂には斗酒尙滿足せざるに至るは。吾人が日常認する處なり。斯くの如き己お常態に非ぞして一種の恐るべき疾患を惹起せしものなり。之を名けてアルコホル中毒症と謂ふ。抑もアルコホル中毒家なるもの。常に麻醉症に陥り居るものにして。終夜終日半醒半眠の間に呻吟し、吾にありて吾を知らず。去れば不知不識の間只其れ酒と貪り其興奮力を借りて。僅に人事と保持し。酒氣あれば乃ち生き之に醒むれば死者同然となる。而

かも酒量の重積に依り遂に彼身体の樞府に大破裂を發し則死す。嗚呼又戒めざる可けむや。

抑も斯る害毒と來す原因は何ぞや。他あし過量よ習慣すればなり。而て過量よ習慣する一大元因と酒杯の交換是なり我國古來獻酬を以て禮とするが故に。復た止を得ざる次第なりと雖も。惟ふも初獻納杯の二回を以て禮と則ち足らん。所謂獻酬織るが如くなご反て禮を犯となさか。縦し絶對的禮と欠くと謂ふと雖も。前述べの恐るべき大害毒と比較し來れば事の輕重自ら明あらん其れ然り而して猶此杯の交換よ就て衛生上より觀察を下げば寧ろ寒心。戰慄よ堪へざるものあり。他あし傳染毒素の移傳之あり。抑も傳染毒素の人身内に入るよ自ら一定の門ありて。或て呼吸と共ふ鼻孔より入り或は飲食物と混じて口

よりし。或は直ちに觸接部を犯し。或は創口より入る等種々にして一ならず。必竟毒素の性質に關してあり。彼恐るべき虎列拉赤痢等の毒ハ殊々口門より來るあり。媒毒素の津唾涙液等諸般の腺液に潜伏する事は古來人の信じて疑はざる處なり。結核菌は如何。豫め胃の機能を弱めて結核患者の痰末若くは培養菌を直ちに動物の胃中へ注入して腸結核を發せし實驗あるふあらずや。然れども或ハ云はん。胃ハ有機物を消化するの府なる故に。仮令黴菌を胃中へ傳ふるも乍ち消化し盡し毫も害する事なしと。素より然り然れども胃なるものは常に必ずしも健全なる者ハ非ぞ。又仮令病患を有せざるもせよ。少しく飲食物を多量へ取らんか。胃液之を十分に消化し盡す能くぞ。偶々毒菌の消化液と免かれたるもの腸内に來れば忽ち繁殖を逞ふし疾患を誘起するは復た言を待たざる處なり。況んや暴飲暴食よ於てをや。又バクテリアの種類に依りバクテリア其物が直ちへ毒物ならざるも一種の化學的毒物を生産するものあり。斯るバクテリアが胃中に來れば胃液は何の効もなさざるあり。夫而已ならず種子を有するバクテリアの種子は尙菓實の種子に於けるが如く堅固たる被膜を有するが故よ。百度以上の温み熱するも死滅する事なく。胃液素より之を消化し能わす。又或云はん。杯は杯洗にて毎時之と洗ふが故へ傳染毒素附着の恐れなしと。杯洗何者ぞ沸騰水消毒水を盛りたる杯洗あるを聞かず。初めこそ清れなき其後には汚穢不潔實に謂ふに忍びず。斯る不潔の水中に杯を投じ恬として顧みざるは實に怪

訝の至りあり。然かも以て洗ふと稱す。是れ故らに汚染するなり。寧ろ洗なきに若かき

終りよ尙一言注意を要する事と。人の津唾の不潔なる事よて。仮令病毒を混せざる直も常に多量のバクテリアが住居し。彼の吾人が齒垢と稱するものなり。實に其衆塊あり。是等と概ね無害のバクテリアなれども。無害なれいどて強ち安心すへき者に非ず。健康なる犬の唾液を取りて家兎の血中と注射し。必死の敗血熱を發せし實驗あり。去れば人の口内も存ずる無害のバクテリアと雖も他動物に對し如何なる毒物なるや未だ知るべからず。其れのみならず。人各殊異性ありて甲に無害のものも。乙に取ては毒となりて働くものあり。縦し人間の口内に常住すべきバクテリアは大抵同種屬あると以て何人に

取ても害なくとするも。偶々不意に口内と止り或は一時口内にて繁殖しする者にして而も其人お害なく。他人に對しては有害性あるんおは。果して如何ぞや。予の友人に甚だ奇異のものあり。乃ち牛肉に對し尤も鋭敏ある殊異性を有するものおして小しにても。之と食すれば忽ち蕁麻疹と稱する皮疹は罹るを免れず。某日不知不識家族の牛肉を煮たる鍋を用ゐて煮たる野菜を食せしむ。則ち同様に皮疹を發したり。之れ素より尋常以外の鋭敏なる特異性は相違無きも亦以て健康人の津唾と雖も。時よ如何なる害毒となりて他人を發するやも知るべあすと謂ふの例証とするに足らん乎

以上の理由なるを以て吾人と努めて此恐るべき毒物移傳媒介する杯の交換を絶対的は廢棄せ

ざるべからせ。何ぞ禮儀と顧みるの遑暇あらんや。今此節酒會が設けられたるこそ實に幸なれ。

吾人は益團結心を堅ふし。斷じて杯の交換を排

し過酒の害毒一掃し同時お天授の生命を憂惜

し以て國民の本分を全ふし。延て此美風をして

汎く社會に布及せん事は予の希望お耐にざる所

なり』(了)

柏手に飛ばす軒の雀かな、

雜 報

● 高安教授 去る十月廿四日無事伯林到着の趣

醫學部學生宛にて通信ありたり左ふ全文を掲ぐ

拜啓時下秋冷の候お御座候處諸氏益々御壯健

御勉學の事と遙お奉賀候陳者拙者海陸無恙去

る廿四日到着仕候間御安神おし被下度候詳細

は落着次第緩々御報道可申上候先之不敢取到

着の御通知迄如此御座候草々

枕上書感

田 秋海初稿

自識終生名不稱從來樽散百無能十年夜坐成何事

慚愧書窓隔夕灯

元 旦

竹 軒

瑟の手かゝてや波まんず春の水、

若水と波む音しけし仲間井戸、

萬歳かしはし止めし主かな、

十月三十日

Berlin, Louisenstr. 6111. bei Fr. Goethe

高 安 右 人

第四高等學校醫學部學生御中

●實彈射的 醫學科第四年級、藥學科第三年級
一同は十月二十一日上野陸軍射的場に於て實彈
射的と舉行せり

●衛戍病院 金澤衛戍病院は十一月十四日石川
縣金澤市下石引町へ移轉せり

●第十三回講話會 三十二年十二月三日醫學部
臨床講義場内眼科教室に於て開かる會する者職
員學生金澤醫會々員等百名餘午後二時に至り擊
拆開會と報じ左の順序に従ひ演說あり

開會の辭 佐々木教授

氏は前講話會よりの出來事中醫科及藥學科卒
業生を出せる事金澤醫會々員の講話會も出席
傍聽するを許可せる事校友會豫算成立の件に
つき報告あり

第一席 黒死病よ就て 森島 講師

氏は黒死病に於ける一般の學說症候等及神戸
地方に發せる同病類似患者の經過録を演述さ
れたり詳細は載せて本誌原著欄に在り

第二席 「ペスト」菌よ就て 上田 教授

細菌學上に於ける本菌の位地病理上の關係よ
り「ペスト」病の診斷療法及豫防法あつき北里
菌「エルサン」菌の「アレパラート」を示し氏が
得意の快辨を揮これ時節折孰れも來聽者の感
を惹きたり

第三席 如何にして醫學を修むべきかを論じ
併せて通常會員に望む 湯本四郎右衛門君

氏は主として醫科一年生に向て希望とる所あ
り醫學研究の方法及諸科學との關係につき熱
心に論せらる

第四席 講話會に對する希望

山 碕 教 授

● 第四高等學校青年節酒會記事

氏の會員諸君が講話會に對して熱心忠實ならん事殊々學生諸君は説の斬新なると陳舊なるとを問はず又事の醫學に涉ると否とを論ぜずと北條校長の名譽會頭、山碕主事に會頭、今井相共お利益し相互お辨論を練習する好適地となして演壇お立ち將來社會に出る曉一步も先進の士お譲らざる素養を蓄へ置かん事を希望せらる

十一月二十二日本校倫理講堂に會す、午後三時開會新入會員宣誓式を舉行し、幹事田中秀知君

新入會員氏名等と報告あり、次て新入會員を代表して今井正親君宣誓文を朗讀せり、

第五席 「フオルマリソ」固定に就て

次て今井教授、北條校長、佐野助教、金子教

金 子 教 授

授、村上教授、等交々登壇して各々所思と述べ

氏の「フオルマリソ」の腫核分体固定料として

諄々として訓誨せられ、四時三十分閉會せり

利益ある點につき自己の實驗説と述べられた

名譽會頭 北條 時敬

り委細は原著欄にあり

會 頭 山 碕 幹

右終て時辰正に五時四十分を報じぬ委員長閉會

副會頭 今井 省三

と告げ一同夜に入て散會せり

幹 事

醫四 松王 數男

第四問 食鹽水注入ノ適應症及ヒ方法

全 村田 讓

內科學

醫二 土田久三郎

第一問 腸内寄生虫ノ種類各種ノ診斷及ヒ療法

法三 田中 秀知

第二問 痘瘡ノ症候鑑別

文二 阿部 維巖

第三問 腦疾ノ部位診斷ニ關スル要点

工二 佐藤 英吉

第四問 蛋白尿ノ原因及ヒ蛋白ノ検査法

三部二 藤田 敏彦

眼科學

全 中村 讓次

第一問 急性顆粒性結膜炎ノ症候鑑別療法

賛助員 二百四十四名

第二問 角膜潰瘍ノ轉歸療法

通常會員 三百〇七名 (舊百六十九名
新百三十八名)

第三問 視神經炎ノ原因及ヒ眼底ノ變狀

●海軍少軍醫候補生採用試験問題如次

衛生學

外科學

第一問 大氣中ノ温氣ヲ檢知スル法

第一問 血管ノ種類鑑別療法

第二問 中等ノ體重ヲ有スル男子ニシテ中等度ノ勞働ニ對スル保健食ヲ記セ

第二問 內崑頓(腸ノ閉鎖)ノ原因症候療法

第三問 飲料水ノ化學的検査法

第三問 結核性膝關節炎ノ症候療法

組織學實習(標本)

腎臟 肝臟 舌 ノ三枚

●軍醫生の再勤 歩兵第七聊隊附軍醫、北川健三、齊藤幸作、番場友平の三氏と去十一月三十日現役満期の處、更又引續三ヶ月勤務演習を施行すと成り。

●豫備見習士官の除隊 豫備見習士官東良平、河合麻鳥、同藥劑官八十島庄五郎、林常雄の諸氏は去九月一日勤務演習の爲め歩兵第七聊隊へ入隊せしが演習終了し十二月一日除隊せり

●石森得業士 這回一年志願兵として敦賀第九聯隊へ入隊せられたり

●小倉加一郎君 昨年十一月上旬東京醫科大學撰科へ入學せたる

●松原三郎君 神經組織研究の爲東京大學病理

學撰科にありし同氏は今般同精神病學助手に任せられ兼て巢鴨病院在勤を命せらる

悲報二、寺本近松君、曩は醫學得業士の稱號を得て高松病院ありし同氏は昨年十月病を得て溘焉として永眠せらる哀何ぞ堪へんや茲は氏の知己數氏相圖り普く有志の血涙と集めて圖書を購ひ十全會に寄送し永く同氏の紀念に備へんとす主旨書等廣告欄あり

高儀文定君、昨年春以來肺勞を患へ休校保養中なりしが八月病勢大お加はり遂に永眠せたる嗚呼悲哉

●酒井得業士 東京大學法醫學撰科にありし同

氏は今度永樂病院外科醫員を命せらる

●大塚正一君、千葉玄也君 十二月中旬より大塚

●武田正壽君、大西瀨治君 海軍少軍醫候補生

君ハ内科第一部へ千葉君は婦人科へ出勤せらる

志望の爲先般上京されし而氏は入學試験に目出

●望月慶作君 先に一年志願兵として静岡聯隊

度合格の上少軍醫候補生を命せられ軍醫學校に

ありし全氏病氣の故を以て今般除隊の旨同氏

入學せらる

より通知ありたり

●藤岡勝治君 豫て自宅へ開業中なりし同氏は

吉川砥直君 一年志願兵として新發田聯隊にあ

今度金澤病院醫員拜命婦人科に出勤せらる

り

●第二學期授業時間割は左の如し

醫學科第十三學年第二學期授業時間割

級位		月	火	水	木	金	土
自八時	至九時	内科 佐々木	獨逸 下平	内科 山碕	獨逸 小川	内科 佐々木	獨逸 下平
自九時	至十時	外科 下平	婦人科 小川	外科	婦人科	外科	婦人科
自十時	至十一時	外來	外來	外來	外來	外來	外來
自十一時	至十二時	全	全	全	全	全	全

醫	年 三 第 科 學 醫										年 四 第			
	至 九 時	自 八 時	至 三 時	自 二 時	至 一 時	自 一 時	自 一 時	至 一 時	自 一 時	至 一 時	自 一 時	至 三 時	自 二 時	至 一 時
藥物	外總	全	全	病理實習		全	外來	外科	內科	內科	內科	全	全	產科
山碓	木村			手術及臨床	皮膚		外來	婦人科	眼科	眼科	全	全	手術及臨床	
診斷	藥物	全	實習	局解	下平	全	外來	小川	小川	內科		局解	法醫	
獨乙				金子	獨逸	全	外來	外科	內科	山碓		金子	村上	
村田				末近										
外總	診斷	全	全	病理實習	獨逸	獨逸	皮膚	婦人科	眼科			法醫		
					末近									
藥物	外總	全	實習	獨逸		全	外來	外科	內科	內科	全	全	手術及臨床	
				小川					佐々木	佐々木			實習	
外總	藥物	全	手術及臨床	局解		全	外來	婦人科	眼科	眼科	全	體操	局解	
			體操											

年一第科學醫										年二第科學									
至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自
二時	一時	二時	一時	〇時	九時	八時	八時	三時	二時	二時	一時	二時	一時	二時	一時	二時	一時	〇時	〇時
分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分
体操	化學	獨乙 甲	獨乙 甲	物理	獨乙 甲	解剖	獨乙 甲	解實	体操	解實	体操	獨乙	生理	獨乙	生理	獨乙	生理	生理	生理
	高山	村末	村末	末近	末近	飯森	飯森	金子				村田		末近		末近			
解剖	獨逸	化學	化學	植物	植物	組織	組織		病理		病理	生理	生理	生理	生理	生理	生理	生理	生理
金子	村末			堤	堤	金子	金子		村上		村上								
体操	化學	獨逸	獨逸	物理	物理	解剖	解剖	全	全	全	全	解剖實習	解剖實習	全	全	全	全	生理	生理
		村末	村末			飯森	飯森												
解剖	植物	組織	組織	化學	化學	獨逸	獨逸		体操		体操	生理	生理	病理	病理	病理	病理	病理	病理
金子						甲末村	甲末村												
	組織	獨逸	獨逸	物理	物理	化學	化學	全	全	全	解剖實習	獨逸	獨逸	生理	生理	生理	生理	生理	生理
		村末	村末									末近	末近						
体操	化學	獨逸	獨逸	組織	組織	全	全	解剖	体操		体操	病理	病理	生理	生理	生理	生理	生理	生理
		甲	甲					飯森											
		乙	乙																
		村末	村末																

備考

一醫四年〇〇印ハ本校ニ於テ授業ノ分

土曜日局解ハ午后零時半ヨリ始ム

● 雜報

法醫學ニ關スル實驗ハ臨時他ノ授業ヲ歛キ施行スルコアルヘシ

一 醫三年〇〇印ハ本校ニ於テ授業ノ分

土曜日局解ハ午后零時半ヨリ始ム

病体解剖ハ死体アルキ木曜日ヲ除クノ外午后二時ヨリ他ノ授業ヲ歛キ施行スルコアルヘシ

一 醫二年〇〇印ハ臨床講義場ニ於テ施行ノ分

藥 學 第 三 學 年										級 位						
至	自	至	自	至	自	至	自	至	自	時 日	月	火	水	木	金	土
至九時	自九時	至四時	自四時	至三時	自三時	至二時	自二時	至一時	自一時	至〇時	自〇時	至九時	自九時	至九時	自九時	至九時
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
製	化			全	全	全	全	全	全	全	製	化	實	習	高	山
調	劑			全	全	全	全	全	全	全	製	化	實	習		
獨	逸	全		獨	逸	全	全	全	全	全	衛	化	實	習	井	櫻
製	化	獨	逸	全	全	全	全	全	全	全	藥	品	鑑	定	井	櫻
生	藥			全	全	全	全	全	全	全	衛	化	實	習	井	櫻
製	化			全	體	操	全	全	全	全	裁	化	實	習	井	櫻

●文部省令第四十四號

●雜報

省令 (官報)

明治三十一年文部省令第二十號學校傳染病豫防及消毒方法中左ノ通改正シ發布ノ日ヨリ施行ス

藥學科第一					藥學科第二					
至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	至自 一 時時	
分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	分分	
體操	化學 高山	獨逸 村田	物理 未近	植物 堤			體操	獨逸 村田	調劑 高山	生藥 堤
	獨逸 未近	化學	全	顯微 堤		全	全	定量實習 櫻井	獨逸 未近	製化
體操	化學	獨逸 村田	物理	植物				生藥	調劑	製化
	全	顯微	化學	獨逸 未近			體操	全	定量實習	生藥
	定性 堤	獨逸 村田	物理	化學	全	全	定量實習	獨逸 未近	全	生藥實習 堤
體操	化學	獨逸 未近	全	定性			體操	全	全	定量實習

明治三十二年十一月二十二日

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一條第一類甲中發疹室扶斯ノ次ニ「ベスト」ヲ

明治三十二年十二月五日

加フ

●内務省令第五十六號

第六條中「學校ニ於テ」ヲ「學校内、學校所在地及

明治三十二年七月内務省令第三十四號海港檢疫法

其近傍若クハ生徒通學區域内ニ於テ」ニ改ム

施行規則第三條第一項中「ベスト」ハ七日間ヲ

●内務省令第五十五號

「ベスト」ハ十日間ト改ム

明治三十年五月内務省令第十一號傳染病豫防法施

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

行規則第六條第一項第二號中「ベスト」ノ三字ヲ

明治三十二年十二月五日

削除シ更ニ左ノ一號ヲ追加ス

●陸軍省令第三十四號

「ベスト」

陸軍召募規則左ノ通改正ス

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若ハ入舎セ

明治三十二年十一月十五日

シメ又ハ患者治癒若ハ死亡シタル後消毒方法

陸軍大臣子爵 桂 太郎

ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿十日間但傳

第三章 見習醫官、見習藥劑官、衛生部依託學生

染病豫防法第十九條第二ノ場合ニ於テハ尙十

及軍醫學校生徒

日以内繼續スルコトヲ得

第一款 見習醫官、見習藥劑官

第二款 衛生部依託學生、同依託生徒

第三條 左ノ各項ニ該ル者ハ採用セズ

第三款 軍醫學校生徒

一 妻アル者 軍醫學校生徒
志願者ヲ除ク

陸軍召募規則

二 本人並ニ父兄若クハ戶主家資分散又ハ破

第一章 總則

産ノ宣告ヲ受ケ未タ復權ヲ得サル者及身

第一條 本則ハ陸軍各兵科現役士官候補生、地

代限リノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサ

方幼年學校生徒見習醫官見習藥劑官衛生部依

ル者

託學生同依託生徒軍醫學校生徒獸醫部依託學

三 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者及賭博犯ノ處

生同依託生徒各兵科下士候補生蹄鐵工長候補

分ヲ受ケタル者

生砲兵工長候補生衛生部下士候補生縫工長候

四 素行修マラサル者及家庭不良ナル者

補生靴工長候補生及軍樂學校生徒召募ノ手續

第四條 志願者ノ年齢及身長左ノ如シ但シ年齡

ヲ規定スルモノトス

ハ入隊又ハ入校ノ期月ヲ以テ之ヲ算ス

第二條 各兵科現役士官候補生地方幼年學校生

衛生部依託學生同依託生徒 年齡十八年以上

徒軍醫學校生徒砲兵工長候補生縫靴工長候補

身長五

生及軍樂學校生徒ノ召募人員ハ陸軍大臣其ノ

軍醫學校生徒

年齡二十年以上三十年以下
身長五尺以上

時時之ヲ告示ス

第五條 入隊又ハ入校期日左ノ如シ

衛生部下士候補生

十二月一日

第十二條

志願者願書ヲ差出シタル后入隊又ハ

軍醫學校生徒

六月一日

入校迄ノ間ニ於テ轉籍轉住、氏名變更犯罪死

第六條 検査ヲ分テ身體検査及學科試験トシ學

亡其他願書類ニ記載ノ事故及身元保證人等ニ

科試験ハ身體検査合格者ニ就テ之ヲ行フ

異動ヲ生スルトキハ本人又ハ身元保證人ヨリ

第八條 志願者ハ父兄親族其ノ他一家ヲ爲ス身

最初願出ノ手續ニ從ヒ速ニ届出ヘシ但シ陸軍

元確實ノ者二名ヲ以テ保證人ト爲シ願書^{第一}

號書

部内ノ志願者ニシテ轉隊派遣其ノ他本文ノ異

式ニ戶籍謄本及履歷書^{第二}號

書式

ヲ添附スヘシ但

動ヲ生スルトキハ部隊長ヨリ報告スヘシ

シ志願者ハ相互ニ保證人トナルコトヲ得ス

入隊后若クハ入校后身元保證人ヲ改メントス

第九條 志願者ハ期日前検査地ニ到着シ書面ヲ

ルトキハ隊長又ハ學校長ニ届出ヘシ

以テ其止宿所ヲ指定ノ場所ニ届出ツヘシ但シ

第十三條

入隊又ハ入校ノ命ヲ受ケタル者疾病

検査地ニ居住ノ者ト雖モ陸軍部外ノ志願者ニ

其ノ他止ムヲ得サル事故ヲ生シ入隊又ハ入校

在テハ本文ニ準シ届出ヘシ

延期ヲ願出テントスル時ハ其ノ願書ニ何日間

第十條 士官候補生、地方幼年學校生徒及軍醫

猶豫ノ旨ヲ記シ疾病ハ醫師ノ診斷書其他ハ市

學校生徒ハ新ニ撮影シタル寫真紙^{裏面ニ族籍}

氏名ヲ自書

町村長ノ證明書ヲ添ヘ隊長又ハ學校長ニ差出

スヘシ 一葉ヲ携帶シ検査醫官ニ差出スヘシ

ヘシ

入隊又ハ入校途中ニ於テ前項ノ事項ヲ生シ期

免狀寫若クハ藥劑師免狀寫ヲ添ヘ六月十日迄

日ニ到着シ難キトキハ電信若クハ郵便ヲ以テ

ニ隊長ニ差出シ隊長ハ之ヲ調査シ六月十五日

隊長又ハ學校長ニ届出ヘシ其事故止ミ入隊又

迄ニ師團軍醫部長ニ送付スヘシ

ハ入校スルトキ疾病ハ醫師ノ診斷書其他ハ市

第五十五條 師團軍醫部長ハ陸軍省醫務局長ヨ

町村長若クハ船長等ノ證明書ヲ以テ更ニ届出

リ受領スル試驗問題ヲ隊付高級醫官若クハ衛

ツヘシ

戍病院長ニ下付シ検査ニ要スル必要ノ訓示ヲ

第一項及第二項ノ事故ニテ入隊又ハ入校期日

與ヘ同官ヲシテ志願者ノ検査ヲ行ハシムヘシ

ヨリ二十日以内ニ到着セサル者ハ除名スルコ

第五十六條 隊付高級醫官若クハ衛戍病院長前

トアルヘシ

條ノ検査ヲ終レハ其答解書ヲ秘封シ自己ノ意

第三章

見習醫官、見習藥劑官、衛生部依託

見ヲ附シ試驗ニ關スル書類ト共ニ六月三十日

學生同依託生徒及軍醫學校生徒

迄ニ師團軍醫部長ニ差出スベシ

第一款 見習醫官、見習藥劑官

第五十七條 師團軍醫部長ハ前條ノ書類ヲ審査

第五十四條 一年志願兵中軍醫生、藥劑生ニシ

シ其ノ成績ニヨリ列序ヲ定メタル人名書ヲ製

テ見習醫官又ハ見習藥劑官ヲ志願スルモノハ

シ之ニ試驗書類ヲ添ヘ且自己ノ意見ヲ附シ七

第八條ニ定ムル願書其ノ他ノ書類ニ醫術開業

月十五日迄ニ陸軍省醫務局長ニ差出スヘシ

第五十八條 陸軍省醫務局長ハ前條ノ書類ヲ審査シ採用スヘキ者ト否トヲ定メ陸軍大臣ノ認可ヲ受ケ師團軍醫部長ニ達シ軍醫部長ハ隊長ヲ經テ之ヲ本人ニ通達スヘシ

第二款 衛生部依託學生、同依託生徒

第五十九條 衛生部依託學生同依託生徒ノ要員

ハ陸軍省醫務局長之ヲ帝國大學總長高等學校長若クハ府縣立醫學校長ニ通牒シ志願者ヲ召募スルモノトス

第六十條 志願者ハ第八條ニ定ムル願者其ノ他ノ書類ヲ帝國大學總長若クハ當該學校長ヲ經テ陸軍省醫務局長ニ差出シ醫務局長ハ本人ノ學力品行等ヲ審査シ且最寄部隊付ノ軍醫ノ身体検査ヲ受ケシメ其成績ニ依リ採用スヘキ者ト否トヲ定メ帝國大學總長若クハ當該學校長

ヲ經テ之ヲ本人ニ通達シ其採用スヘキ者ニハ依託學生若クハ依託生徒ヲ命スヘシ
前項ノ身体検査ハ醫務局長ヨリ豫メ該部隊長ニ照會シ之ヲ行ハシムヘシ

第六十一條 依託學生ハ帝國大學、依託生徒ハ

當該學校一般ノ規定ニ從ヒ修學セシム

第六十二條 依託學生及依託生徒修學中ハ情願ヲ以テ依託學生又ハ依託生徒ヲ辭スルヲ許サス其ノ成業ノ目的ナキ者及品行不正學業懈怠

若クハ規則違犯等ノ故ヲ以テ帝國大學總長若クハ當該學校長ニ於テ退學ノ處分ヲ爲スヘキ者又ハ傷痍疾病ノ爲メ休學六箇月以上ニ至リ仍ホ治癒ノ見込ナキ者アルトキハ陸軍省醫務局長ハ帝國大學若クハ當該學校長ノ通知ヲ受ケ依託學生若クハ依託生徒ヲ免スヘシ

第六十三條 依託學生及依託生徒ニハ授業其ノ

内一種ヲ限リ試験ス

他一切ノ費用ニ充ツル爲メ左ノ金額ヲ支給ス

内科學 外科學 眼科學

依託學生 月額金拾五圓

耳科學 衛生學

軍醫志願者

依託生徒 同 金拾圓

製藥化學 生藥學 衛生化學 藥劑官志願者

第六十四條 依託學生及依託生徒ノ身上其他戶

外國語學(和文歐譯、歐文和譯)

籍ニ移動ヲ生シタルトキハ本人若クハ保證人

第六十七條 學科試験ハ軍醫學校ニ於テ五月一

ヨリ陸軍省醫務局長ニ届出ベシ

日ヨリ之ヲ行フ

第六十五條 依託學生及依託生徒其ノ課程ヲ卒

第六十八條 陸軍部外ノ志願者ハ第八條ニ定ム

ハ卒業試験ヲ終リタル時ハ陸軍省醫務局長ハ

ル願書其他ノ書類ニ醫術開業免狀寫若クハ藥

帝國大學總長若クハ當該學校長ヨリ其試験成

劑師免狀寫ヲ添ヘ二月二十八日迄ニ居住地ノ

蹟等ニ關スル通知ヲ受ケ之ニ見習醫官又ハ見

市町村長ニ差出シ町村長ハ之ヲ郡長ニ差出ス

習藥劑官ヲ命スヘシ

ヘシ

第三款 軍醫學校生徒

第六十六條 軍醫學校生徒召募ノ試験科目左ノ

第六十九條 郡市長ハ志願者ヨリ差出シタル願

如シ但外國語學ハ本人ノ冀望ニヨリ英佛獨ノ

書其他ノ書類ヲ調査シテ與書證印ヲ爲シ又身

元明細書

第三號ヲ製シ之ヲ書類ニ添附シ三月

三十一日迄ニ師團軍醫部長ニ送付スヘシ

第七十條 陸軍部内ノ志願者ハ願書ニ第六十八

條ノ免狀寫ヲ添テ部隊長ニ差出シ部隊長ハ其

身分財産等ヲ検査シ身元明細書第三號ヲ製シ

兵籍者及考科表寫考科表ナキモノハト共ニ願

書ニ添附シ三月三十一日迄ニ師團軍醫部長ニ

送付スベシ

第七十一條 師團軍醫部長ハ志願者ヲシテ居住

地最寄ノ部隊附軍醫ノ身體検査ヲ受ケシメ願

書其他ノ書類ヲ取纏メ之ニ志願者人名書ヲ添

ヘ軍醫學校長ニ送付スヘシ

前項ノ身體検査ハ師團軍醫部長ヨリ豫メ該部

隊長ニ照會シ之ヲ行ハシムヘシ

第七十二條 軍醫學校長ハ試験問題及試験施行

ノ方法ヲ定メ陸軍省醫務局長ノ認可ヲ受ケ又

前條ノ書類ヲ審査シ學科試験ヲ行ヒ其成績ニ

依リ採用スヘキ者ト否トヲ定メ其人名書ニ檢

査書類ヲ添ヘ陸軍省醫務局長ニ差出シ認可ヲ

請ケ師團軍醫部長及部隊長郡市長町村長ヲ經

テ之ヲ本人ニ通達シ其採用スヘキ者ニハ入校

ヲ命スベシ

第一號書式ノ三（用紙美濃白紙）

見習醫官（見習藥劑官）（衛生部依託學生、同

依託生徒）（軍醫學校生徒）（獸醫部依託學生

同依託生徒）願

見習醫官（見習藥劑官）（衛生部依託學生、同依託

生徒（軍醫學校生徒）（獸醫部依託學生、同依託生

徒）志願ニ付御許可被成下度御採用ノ上ハ御規

則嚴重ニ相守リ誓テ陸軍ニ從事可仕候仍テ戶籍

謄本履歷書何々免狀相添ヘ身元保證人連署此段

奉願候也

履歷書

府縣族籍職業

戶主ニアラサレハ
子 弟

卒業

一何年何月何日何學校へ入學何年何月何日同校

府(縣)郡(市)町(村)番地住 氏名印

一何年何月何日何學校何年學級ヨリ何學校何年

府(縣)郡(市)町(村)番地寄留 年月日生
何年何月當何年何月

學級ニ入學何年月日同校卒業

身元保證人

何年月日何所ニ於テ何々研究

一何年月日何ニ從事ス

府縣族籍職業

一何年月日何ニ依リ賞(罰)等

府(縣)郡(市)町(村)番地住(寄留)

(右ノ外履歷ニ關スル事項ハ悉ク記載スヘシ)

氏名印

年月日

右之通相違無之候也

同

本人 氏名印

氏名印

年月日 身元保證人 氏名印

何師團軍醫部長氏名殿

同 氏名印

第二號書式 (用紙美濃白紙)

第三號書式 (用紙美濃紙)

府縣族籍何某身元明細書

本 人		任官、就職、就役、就業等年月日ヲ分チ其經歷ヲ明記スヘシ	
父	實父(養父、繼父アル者ハ各別ニ)ノ任官、就職、就役、就業等商工業ハ營業ノ税類ヲ區別シ、死者ハ戰死、病死等年月ヲ分チ其經歷ヲ明記スヘシ		
母	實母(養母、繼母アル者ハ各別ニ)ノ生家父母ノ族籍氏名其職業ヲ明記スヘシ		
戸 主	本人又ハ父戸主ニアラサルトキハ父ノ例ニ準シ戸主ノ身分ヲ明記スヘシ		
兄 弟	各別ニ其身分ヲ概記スヘシ		
本人ニ屬スル者	何々利子	何	圓
本人以外ニ屬スル者	戸主某ノ俸給 父某ノ手當金 何々ノ収得 何々ノ益金	何	圓
本人ニ屬スル者	田 幾棟 家屋 見積價格	何	圓
本人以外ニ屬スル者	畑 何歩 山林 見積價格	何	圓
犯罪處刑ノ有無	本人何々、父母何々、戸主何々、兄弟何々等	何	圓
平素ノ行爲	右ニ同シ	何	圓
		一家ニ屬スル合計	何 圓
		一家ニ屬スル見積價格合計	何 圓

右之通調査證明候也

年月日

府縣郡市長

氏名印

●「ペすと」血清治療法の發見 本年十月二十七日倫敦「たいむ」に掲載せる巴里通信より據れり。今回佛國政府より葡萄牙國をばるとし市を於ける「ペすと」研究の爲め派遣せられたるり。市「ばすてーわ」病院長かめつと博士は同二十七日醫科大學に於て研究の結果と報告せり。是に據るに始め博士のをばるとし到着するや同國の醫師と一般に博士の來遊を冷遇し實際上格別の功驗あらざるべしと爲せしも佛國委員と數回の實驗より「ペすと」消毒血漿（「あんち、ペすとせるーむ」）を或る動物に接種し其病疫の發生を防ぎ且つ同一の血清を以て其治療薬に充つるを

得ることと證明せり。斯くて此實驗と大に同國大醫師の信用と博士之と同病患者に應用せしよ果して其結果患者死亡數の四割三分を一割三分に減少せり。尙ほ此血清を接種漿として應用するときは二十日間能く同病の感染を豫防することを得べしと又博士の意見は從へば若し其方法に於て注意周到ならんや同病蔓延の虞あらざるべし。然れどもとばるとしに於て施行すべき方法の貧民の居住地を破壊し其住民を消毒し而して後他方へ移轉せしむるに在り。 （官報所載）

●牛莊「ペすと」病況 牛莊に於ける「ペすと」病況に付き同地駐在帝國領事より去年十一月十五

日附を以て左の如く報告あり

(官報)

きみ至れり今清國人の報告に係る十月五日以

前報後氣候漸次寒冷を催し來りし爲め當港

後日々の「ペすと」患者死亡數と舉ぐれば左の

「ペすと」病勢の次第に衰へ昨今之殆ど患者な

左し

月日	死亡數	月日	死亡數	月日	死亡數	月日	死亡數
十月							
五日	一五	十三日	一〇	二十二日	五	卅一日	一
六日	一五	十四日	一五	二十三日	三十一	一月	八
七日	一〇	十五日	一五	二十四日	二	二日	不詳
八日	二〇	十六日	一〇	二十五日	三	三日	一
九日	一〇	十七日	一〇	二十六日	二	四日	一
十日	二〇	十八日	二〇	二十七日	四	五日	三
十一日	一五	十九日	一〇	二十八日	二	六日	四
十二日	二〇	二十日	一〇	二十九日	五	七日	四
		廿一日	一〇	三十日	不詳	八日	五

右の死亡數の果して悉く「ペすと」患者か否し 來検査并に治療に従事し居りしが右醫師か「ペ
 や否と固より之を知るを得せ すと」患者なりとの報告に依り往診したる結果

今回當地衛生局に於て招聘したる本邦醫師十一 實際他病者なりし者少ならず而して眞に「ペス
 人並に助手四人と去月二十七日を以て到着し爾 すと」患者なることを確めたる者今日まで六七人

なりしと云ふ

●孟買「べすと」病況 孟買に於ける「べすと」病況は附き同地駐在帝國領事より本年十月二十四日附と以て左の如く報告あり (官報)

當市の「べすと」は前報後本月三日に至る九週間は靜謐の狀勢を持續せしが本週(本月十日お終る)に入り其死亡數は俄然前週の八十三より百三十三に増進し差引五十を増せど前年來の實驗に據るよ此の如き現象は時疫の將お猖獗ならんとするに當りて現るゝを常とすれば或之是より漸く本病流行の域に進むよあふさるが今既往十週間の死亡届出數を掲ぐれば左の如し

八月八日よ 七五 同十五日に
終る一週間 終る一週間 七一

同廿二日に終る一週間	六四	同廿九日に終る一週間	九五
九月五日お終る一週間	九六	同十二日に終る一週間	八七
同十九日に終る一週間	九四	同廿六日よ終る一週間	八二
十月三日に終る一週間	八三	同十日に終る一週間	一三三

當「ぶれしでんし」に於ける發病以來本月六日までの「べすと」患者死亡概數左の如し

地名	患者	死者
孟買市	六九、七九七	五八、〇五二
アーメダバット	五四	三四
カイラ	二、四三五	一、八五五
ブローチ	一、七二二	一、二七六
シユラット	八、五五〇	六、三〇〇
ザナ	一二、九四一	一〇、二二〇

カンヂツシユ	一、一五二	九三一	カチアワール	二、三三二	一、六四四
ダルワール	四一、三六二	三三三、二七四	カッチ	一〇、六九三	八、八五〇
ビヂャプール	三、八二一	三、〇四六	レワ、カンザ	五二一	四一一
ナシク	一二、八四五	九、八二一	ヂヤンシラ	四五〇	二九五
ブーナ	三三、二一八	二四、六四六	オノンド	二、二〇四	一、五四七
サタラ	三一、〇二一	二四、一六五	ホーア	一、一五七	九二三
シヨラプール	五、二六三	四、二二〇	アカルコツト	四四〇	三三八
アーメドナガル	三、三〇四	二、四〇七	サヅアナー	二三九	一六二
ラトナガリ	九〇〇	七二四	合計	三二六、四三四	二五六、三三八
ベルゴーム	三五、三一四	二六、三二九	● 木村教授歓迎	十二月二十四日午後四時二十	
コルハプール	二五、〇二二	一九、〇七二	二分先に出迎の爲上京せられたる同夫人と共に		
パロダ	八、二七四	六、一八六	歸澤せらるゝの報あるや北條校長金澤醫會々員		
カナラ	五三三	三八九	醫學部職員生徒其他知己の人々無慮二百有余名		
カラチ	一〇、七一四	八、三〇四	期お先つて停車場に會す氣笛朗々として遂々烟		
ハイデシバット	一、一五五	九一七	を吐て顯はらるゝや金澤醫會員の寄附お係る烟		

花數發轟然として虚空に開き、車輪「プラットフォーム」に停るや山崎主事佐々木教授に導かれて下車せる氏の身邊を擁せる無数の賀辞殆んど應接に暇なしかくて學生一同は同氏の萬歳を三呼し、實に非常の盛況にてありき、之より氏の直に西町金谷館なる歓迎宴會に臨まれしが以後の消息に至りては吾人の知るところに非ざるも只聞得たる概況を記んには

●叙任辞令

十一月十八日

見習軍醫ヲ命ス

全

見習軍醫

- 河内監次郎
- 橋本喜久三
- 河内監次郎
- 橋本喜久三

歩兵第七聯隊附ヲ命ス

十一月十七日

叙從七位

任陸軍一等軍醫

臺中衛戍病院附陸軍一等軍醫

免本職補臺北衛戍病院附

海軍中軍醫正八位

陸軍二等軍醫

生駒廣太郎

生駒廣太郎

全館門前にて歓迎縁門を設け國旗を交又し各國旗提灯を數多吊せる杯裝飾、會場の準備能く整理せり廳て席定まるや山田謙治氏總代として同醫學士が久敷官命を帯ひ外科學研究として獨國を留學し今回業を終海陸恙なく歸朝せられしを賀し併せて我醫界に於ける將來の裨益の實を鮮少なからざる旨を述べ之に對する木村氏の答辨ありて酒宴お移り樂隊吹奏爆竹の余樂に乗して主客陶然昔年の舊盟を温め萬歳を呼んで散會せりと云ふ

十二月十二日

陸軍三等軍醫

澁谷 孝慶

藤岡 勝治

補對馬要塞砲兵大隊附

醫學部婦人科學產科學教務ヲ囑托ス

全

池田 耕

大塚 正一

補歩兵第四十六聯隊附

醫學部内科副手ヲ命ス

永井 玄吾

十一月三十日

補歩兵第五聯隊附

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

東 良平

全

神谷貞三郎

十一月二十七日

補丸龜衛戍病院附

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

藤岡 勝治

見習藥劑官

山岸理一郎

十二月十六日

任陸軍三等藥劑官

見習醫官

澁谷 孝慶

陸軍三等藥劑官

山岸理一郎

全

池田 耕

補名古屋衛戍病院附

全

永井 玄吾

十二月二日

全

神谷貞三郎

依願職務ヲ解ク

任陸軍三等軍醫

石川縣金澤病院調劑員

淺井文太郎

石川縣金澤病院調劑員ヲ命ス 池田兵三郎 中外醫事新報 全 同 社

十二月十九日 須天堂醫事 研究會雜誌 全 同 會

海軍少軍醫候補生ヲ命ズ 武田 正壽 日本眼科學會雜誌 全 同 會

全 大西 瀨治 中央醫學會雜誌 全 同 會

海軍少軍醫候補生 武田 正壽 大坂醫學校 校友會雜誌 全 同 會

全 大西 瀨治 研瑤會雜誌 全 第五高等學校同會

海軍々醫學校講習生ヲ命ズ 助産ノ栞 緒方病院助產婦學會 全 緒方病院醫事會報 全 同 研究會

十二月二十日 叙正六位 從六位勳六等 櫻井小平太 公衆醫事 全 同 社

●寄贈書目 井上眼科同究會々報全 同 會

日本醫事週報 每號 同 社 三州文學 第一號 三州青年文學會

醫海時報 全 同 社 成醫會々報 每號 同 會

岡山醫學會雜誌 全 同 會 廣島衛生醫事月報 全 同 社

北越醫學會雜誌 全 同 會 日本助產婦新報 全 新瀉高橋產婆學校

京都醫學會雜誌 全 同 會 百斯篤病論 全 大坂醫學校々友會

●雜報

東京醫事新誌

第一一三〇號
全一一三一號

沼田外太郎

第一款 校友會經常費

一一五一、二一五

第一項 十全會費

二二二、五一五

第一目 講話部費

二八、一一五

第二目 雜誌部費

二〇三、四〇〇

第三目 臨時費

一、〇〇〇

第二項 北辰會費

三〇〇、二〇〇

第一目 講話部費

三、〇〇〇

第二目 演說討論部費

三、〇〇〇

第三目 語學部費

一五、〇〇〇

第四目 雜誌部費

二七九、二〇〇

第三項 弓術部費(大會費)

二〇、〇〇〇

第四項 劍術部費(大會費)

二〇、〇〇〇

第五項 柔術部費(大會費)

二〇、〇〇〇

第六項 ベースボール部費

三三、〇〇〇

第七項 ロンテニス部費

四一、五〇〇

● 校友會豫算案 本校々友會評議會よ於て決議せる第十三學年度校友會豫算額は左の如し

收入部

第一款 校友會費

一二一八、〇〇〇

第一項 特別會員寄附

二七六、〇〇〇

第一目 醫學部職員寄附

一〇七、七五〇

第二目 大學豫科職員寄附

一六八、〇〇〇

第二項 通常會員會費

九四二、〇〇〇

第一目 醫學科生會費

二八五、〇〇〇

第二目 藥學科生會費

一五、〇〇〇

第三目 大學豫科生會費

六四二、〇〇〇

收入合計

一二一八、〇〇〇

支出部

第八項 フットボール部費 二〇、〇〇〇

第九項 遠足部費 一五、〇〇〇

第十項 ボート部費 一三三、〇〇〇

第一目 水上運動會費 一〇〇、〇〇〇

第二目 ボート保存費 一一〇、〇〇〇

第三目 權用材費 二〇、〇〇〇

第十一項 陸上運動會費 二〇〇、〇〇〇

第十二項 會務費 二〇、〇〇〇

第二款 臨時費 三六、五〇〇

第一目 ベースボール部臨時費 二三、〇〇〇

第二目 ロンテニス部臨時費 一三、五〇〇

第三款 豫備費 三〇、二八五

支出合計 一二一八、〇〇〇

